


在外研究員研究報告書

2019年 2月 19日 受付

所 属	文学部	氏 名	菊 田 千 春	
職 名	教授			
研究課題名	通時的構文文法の研究			
研究期間	2017年 9月 1日 ~ 2018年 8月 31日			
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先	
	2017. 9. 1 - 2018. 8. 31	Victoria, Canada	University of Victoria	
研 究 費	306.6 万円	研究成果の概要	別記 4,000字程度	
発 表	題 目 名	発表学術誌名 Vol. No.	発行年月日	
	Development of conditional imperatives in Japanese: A diachronic constructional approach,"	<i>Cognitive Linguistics</i> 29, 235-274.	2018年 5月	
	論 文 名、著 書 名	発 行 所 名	発行年月日	
	「主体化・主観化から見たテミル条件文の展開」『ことばとの対話—理論・記述・言語教育』	英宝社	2019年 2月 15日	
	題 目 名	発 表 学 会 名	講演年月日	
	A Diachronic Construction Grammar Analysis of the Focus Construction (<i>Kakari-Musubi</i>) in Japanese	International Conference on Construction Grammar 10 (ICCG10)	2018年 7月 17日	

在外研究成果報告書

2019年2月18日

文学部英文学科 教授 菊田 千春

在外研究期間： 2017年9月1日 ～ 2018年8月31日

在外研究先： University of Victoria (British Columbia, Canada)

研究課題： 「通時的構文文法の研究」

■ 研究課題と在外研究のめあての概要

認知言語学が理論的な言語研究の大きな潮流となって30年ほどになる中、認知言語学に基盤をおく構文文法が、文法研究の主要な枠組みの1つとして発展を続けてきた。いくつかの異なる立場があるが、多くの構文文法に共通するのは、使用依拠モデルに立ち、言語使用に根ざした文法観を持つことである。そのため、生成文法のように抽象的な統語部門を独立したモジュールと考えることはなく、意味と切り離された統語構造を生成する、生得的に備わった能力を文法とは考えることもしない。構文は話者（言語使用者）の言語知識ではあるが、大小さまざまな大きさの「意味」と「形」の組み合わせからなる記号であり、それらは互いに関連づけられ、言語知識は構文のネットワーク構造と考えられている。このような構文文法は、ことばを発し解釈するという具体的な言語使用の場での言語使用者のことばの認知のあり方に注目することから、共時的な体系としての言語知識に加えて、文脈に依存した言語使用の両方を捉えることができる。そのため、言語使用から生じる言語の変化といった言語の通時的側面の分析にも大きな可能性を持つ。

使用依拠モデルに立つ認知言語学は、もともと共時的な言語現象の分析の理論として誕生したが、早い段階から、文法化（grammaticalization）といった言語変化の現象の研究も盛んにおこなわれるようになった。特に、生成文法のような抽象的な「文法」およびその能力を系統発生的にも個体発生的にも独立したものと認めない立場から、抽象度の高い「文法」が具体的な語彙項目から生まれる可能性を追求する意味でも、文法化の研究は大きな理論的意義を持ったのである。

しかし、文法化の研究は、言語変化の研究としては十分とは言えない側面がある。特に、具体的な意味を持つ語彙が文法的な機能語へと変化する過程という本来の「文法化」は言語変化のごく一部しか捉えることができない。特に、文法化が問題にするのは、syntagmaticな語の配列関係の中で生じる意味解釈のズレや再分析であるが、言語変化には、より一般的な当該言語の体系的な知識やそれに基づく paradigmatic な類推なども関与する。「文法化」という概念では、そのような問題を捉えることができない。このようなことから、約5年ほど前から、言語変化を構文文法

の枠組みで考えるという、通時的構文文法が提唱されるようになってきた。特に、「文法化」に代わって「構文化」や「構文変化」という視点からの研究がおこなわれるようになってきている。ここでは、1つの言語変化を、その言語表現（構文）のみの問題とするのではなく、構文ネットワークによって、関連する他の構文の影響にも積極的に目を向け、言語変化をより大きな視点から捉えることができるようになってきている。

今回の在外研究では、このような通時的構文文法での言語研究をさらに深め、それに関連する周辺領域の知識を身につけ、弱点の補強をすること、また、新たなテーマでの言語分析に着手することを目的としていた。

具体的には大きく4つの課題を持っていた。

(1) variation theory についての理解を深めること

Variation theory（変異理論）とは、社会言語学における理論である。従来の共時的な理論言語学は、ソシュール以来の伝統として、「言語システムは共時的には安定し閉じた体系をなしている」ということを暗黙の前提としてきた。そして、それは変化を含む通時的な言語現象と区別されなければならない、とされてきた。言語の個々の部分（語彙、文法）は通時的には常に変化しているものだが、たとえば1965年のアメリカ、や2017年の日本、などある時点で切り取ると、そこにあるのは、それぞれが相補い合って安定した体系を成している個々の言語体系だというわけである。しかしながら、チョムスキーの登場以降、個々の文法や言語を社会的な存在ではなく、個々の話者の頭の中にある知識、と再定義されるようになると、「安定したシステム」としての言語観の正統性が揺らぐ可能性が出てきた。そもそも、例えば、日本人とはいえ、個々の話者はすべて全く同じ文法知識を共有していると言えるのか。個人差はないのか。また、すべてが同じ知識を共有し、安定しているのであれば、なぜ、言語は変化するのか。

理論言語学ではなく、社会における言語の使用に注目する社会言語学では、「安定して画一的な「〇〇語」」というのは虚構であると考え。Variation theory は、言語にはあらゆるレベルでvariationが含まれている一方、そのvariationはでたらめではなく、理由があり、規則性があると考え。そして、共時的に見られるvariationが通時的なchangeの源となると考える。在外研究先のビクトリア大学言語学科のAlex D'Arcy教授は、variation theoryの第1人者で、多くの研究を発表している。私は言語理論は学んできた一方、社会言語学を深く学んだことがない。通時的な言語研究を進めていく上で、variationやchangeを中心的な課題として研究してきたvariation theoryの基本的なアプローチやその知見を知ることは、大きな意味を持つと考えた。

(2) 統計についての基礎的な知識と技能を身につけること

チョムスキー以来、現代の言語学は母語話者の内省による文法判断を重視し、言語能力（competence, I-language）と言語使用（performance, E-language）を峻別すべきと論じてきた。

その結果、現実のデータは「ノイズ」を含んでおり、それを統計的に分析したところで、言語の本質には結びつかないというのが前提となっていた。それに対し、近年の言語学研究ではコーパスなどを用いた現実のデータによる量的分析が重視されるようになってきている。特に、使用依拠モデルに立つ認知言語学でその動きが顕著で、通時的構文文法でも、統計的手法を用いた研究が中心となってきている。

しかしながら、理論的な言語研究の中にデータの量的分析を取り入れるという動きはここ10年足らずに急速に顕著になったものであるため、それ以前に教育を受けた言語学者の多くは量的分析、すなわち統計的手法の基礎を持たない。その結果、統計ソフトを用いて量的分析を行っていても適切さを欠いていたり、また、量的分析に基づく研究論文を十分に読みこなせないということが問題視されている。私も統計学と理論言語学は縁がないという空気の中で、統計学を学ぶ機会のないまま現在に至っていたため、この問題を強く感じていた。そこで、在外研究にあたり、なんとか統計について学ぶ機会を見つけ、その知識を確かなものになりたいと考えていた。

(3) 生成文法理論の最近の動向を学ぶこと

通時的構文文法は認知言語学の中の一つの理論とされているが、構文を扱う以上、統語構造に関する知識は必須である。私はもともと統語論を専門とはしてはいたが、チョムスキーの生成文法が専門ではなく、最近の生成文法の動向を詳しく追ってはいない。現在の生成文法がどのようなトピックをどのような手法で分析しているのか、統語論に関する知識を新たにすることも重要な課題と考えていた。

(4) 通時的構文文法の現在の研究を進め、新たなテーマを見つけること

これまでの研究の継続であるが日本語の「テミル条件文」および「テミル条件命令文」に関する研究をさらに進め、一応の完成をみたいと考えていた。テミル条件文とテミル条件命令文の成立や変化については、これまでから先行研究はあるものの、データを丁寧に分析した実証性の高い研究は多くなく、また、テミル条件命令文の成立／変化の過程を説明するには、通時的構文文法が非常に有効であると考えていた。この研究をさらに進めると同時に、通時的構文文法の理論的な問題についても、考察を加えたいと考えていた。

さらに、テミル条件命令文の研究の後には、通時的構文文法という枠組みの有効性をさらに適切に示すことのできる言語現象を見つけ、新たな研究テーマを見出したいと考えていた。

■ 在外研究中の活動

[1] 聴講した授業

❖ Variation 理論 (Dr. Alex D'Arcy) (2017年9月～12月)

9月より12月の秋学期には、Dr. Alex D'Arcy の variation 理論を基盤とする社会言語学の授業を月曜日と木曜日の週2回、聴講することになった。理論言語学とは違ったアプローチで言語使用を捉える視点は、非常に新鮮で、これまでにない多くの気づきを得た。1枚板のように「○○語」を捉えるのではなく、多くの要因による揺らぎを内包する無数の個々人の言語の集合体として1つの言語を捉えるということ、また、すべての variation には理由がある、という考え方を知ったのは貴重な経験であった。

❖ 統語論 (Dr. Leslie Saxon) (2018年1月～4月)

1月からの学期では、今回の在外研究でお世話になった Dr. Leslie Saxon の統語論のクラスと、引き続き統計学のクラスをいずれも月曜日、火曜日、木曜日の週3回、聴講することになった。現在の生成文法では Minimalist と cartography という2つのやや方向性を異にするモデルが盛んに研究されているが、後者に近いもの前者との接点も志向する新しい Universal Spine というモデルに基づく研究論文を読んだ。現在の生成文法が語用論的な問題である話者や聞き手の認知を統語モデルに取り込もうとしているということを知り、非常に驚き、興味深く感じた。また、cartography に共通する Rizzi のモデルで重視する CP レベルがこれまでとはかなり異なる概念になってきていること、現在、執筆されている博士論文などで、日本語や韓国語の終助詞やその多機能性がどのように統語的に分析されるようになってきているのかといったことを知り、とても勉強になった。言語理論の違いを超えて、考えさせられる問題がたくさんあった。

❖ 統計学 (Dr. Chim) (2017年9月～12月, 2018年1月～4月)

現在言語学の中でも進行中の量的研究に対応するため、統計学についての基礎を身につけたいと考えていたが、言語学科には適当な科目がなく、許可を得て、心理学科の Statistics 300A (秋) と 300B (春) を聴講することにした。いずれの学期も月、火、木の週3回。

統計についてはこれまでからいろいろな本に目を通したり、論文を読んだりしてはいたが、聴講を始めた頃はわからないことばかりであった。しかし、2セメスターに渡って聴講し、練習問題を解き、また、4月以降も統計学に関する本を手当たり次第読むうちに、初め全く理解できなかった内容が、ほとんどわかるようになっていたのは大きな喜びであった。

[2] コロキアム

大学院の colloquium で talk をするように依頼され、10月19日(木) 11:30-13:00 に、“*Temiru conditional*”について talk を行った。Colloquium には学部生や院生、学科の教員の他、類似した研究領域の他学科の教員も参加してくれ、質問やコメントを受けた。いろいろな意見をうけたことで、さらに考えを進めることができた。また、退職されたかつての指導教授も聞きに来て下さり、話をすることができた。

[3] 論文の執筆

(1) 在外研究以前より執筆中で、2回目の改訂中だった“Development of Conditional Imperatives in Japanese: A Diachronic Constructional Approach,”という「テミル条件命令文」についての論文が、10月末に再提出の締め切りを控えていたため、まずは、その論文修正を行った。特に議論展開について、Dr. Leslie Saxonに何度か読んでもらい、内容やスタイルなどについての助言を元に、改訂を繰り返し、無事に再投稿することができた。

これについては、1月半ばに、最終的な論文の受理の知らせが届いた。細かな書式修正を経て3月に最終提出を行い、5月にMouton de Gruyterの*Cognitive Linguistics* 29 (pp. 235-274)に掲載された。なお、本雑誌は、認知言語学では最も主要な国際ジャーナルである。

(2) (1)の論文を再投稿後、4月に締め切りとなっている論文集に投稿する論文の執筆を開始した。テミル条件文の変化とLangackerやTraugottのsubjectificationとの関係を論じた。執筆した論文は、「主体化・主観化から見たテミル条件文の展開」この論文集は、その後、藤岡克則・北林利治・長谷部陽一郎(編)『ことばとの対話—理論・記述・言語教育』として、英宝社より2019年2月に刊行された。(論文は、pp. 107-116)

[4] 学会発表

通時的構文文法で行う新たな研究テーマとして、係り結びや古典日本語の名詞節構文の展開について、研究を進めていった。このテーマは以前より、何度か取り組んだものであるが、当時の理論的枠組みではうまく説明がつかない問題が残っていた。それに対し、通時的構文文法をもちいると、いろいろな問題が解決するのではないかと考えるようになり、そのアイデアを具体化していった。

そして、その考えをまとめ、2017年12月に投稿したところ、2018年7月にパリで開催される国際構文文法学会でのポスター発表の採択の知らせが1月に届いた。そこで、学期が終了した5月頃から、本格的にその準備のための論文原稿の執筆を開始した。

7月の学会はパリのSorbonne Nouvelle 第3大学で7月16-18日に開催された。構文文法に関する多くの研究発表を聞き、また、日本やその他の国からの研究者と交流することができて、多くの刺激を受け、今後の研究の手がかりをつかむことができた。

■ 研究成果

上述のように、在外研究期間には、それ以前より継続していたものも含め、論文を2本完成させた他、コロキウムでの講演、国際学会での発表、各1件をおこなった。

- 2017年11月 言語学科コロキウムでの発表（講演）
Kikuta, Chiharu Uda. "Semantic changes in the development of Temiru-conditionals."
- 2018年1月 *Cognitive Linguistics* への論文の採択。
Kikuta, Chiharu Uda. (2018). Development of conditional imperatives in Japanese: A diachronic constructional approach," *Cognitive Linguistics* 29, 235-274.
(出版： 2018年5月)
- 2018年4月 論文集への論文提出
菊田千春 (2019)「主体化・主観化から見たテミル条件文の展開」藤岡克則・北林利治・長谷部陽一郎(編)『ことばとの対話—理論・記述・言語教育』(pp.107-116) (英宝社) (出版：2019年2月)
- 2018年7月 国際構文文法学会でのポスター発表
Kikuta, Chiharu Uda. (2018). "A Diachronic Construction Grammar Analysis of the Focus Construction (*Kakari-Musubi*) in Japanese." (poster) International Conference on Construction Grammar 10 (ICCG10) (held at Université de Sorbonne Nouvelle, 3eme, France), July 17, 2018.

以上、この1年間の在外研究においては、新たな知識を得、また、研究に没頭することが出来、大変充実した研究期間であった。

今回、このような機会を与えていただいたことに、改めて深く感謝申し上げます。